

保育学分野における研究法の整理と検討 — 質的研究に焦点をあてて —

Arrangement and Investigation Research Methods in the Field of ECEC — Focusing of the Qualitative Research —

中田 範子*・佐久間 路子**

問題と目的

「あらゆる学問は保育につながる」(秋田ら2016)と言う。一見、社会とは隔絶された世界で日々些細なことを繰り返しているように見えてしまう保育という営みは、社会に大きく影響を与え、あらゆる分野とのつながりの中で存在している。保育学分野の研究を概観すると、「多様な分野の研究が集う学際的な研究分野」(池田2019)と言われ、保育学分野の被引用文献は、保育学、教育学、心理学等の人文・社会科学分野のみならず、生理学、看護学等の生命科学分野、建築学等の理学・工学分野まで広がっている(池田2019)。

しかし、保育現場をフィールドとした研究論文には、保育者の経験則に基づくことが多く、それらが理論的に整理されたり、科学的に裏付けられたりすることが乏しいという指摘(西本ら2006)や、現場教師の子どもに対する評価の信頼性が欠如しているという指摘(Evans, G. W 2006)等が散見される。しかし、このような指摘は、果たして妥当なのか、と疑念をもつことがある。それは、そのような指摘には、保育学分野における「理論的」整理、「科学的」分析とはどのようなものなのかを十分に言及されないままであるからである。また、教師が子どもとの関係の中で捉えた事実や事象が、客観的でないという理由で、信頼性に欠くデータと短絡的に評価されてよいものなの

か、とも考える。

このような、保育学分野の研究に対する指摘に
応えるためには、まず、「科学」をどう捉えるの
かを明らかにする必要がある。本稿では、「科学」
を「人間科学」の定義に基づいて定義し、保育学
分野には「人間科学的アプローチ」で接近するこ
とが求められると考える。人間科学的アプローチ
は、人間を社会的な文脈から学際的に捉えること
が特徴であり、これを保育学分野に置き換えると、
子どもと他者や環境の相互作用、子どもとの関係
の中に身を置いた研究、個別具体的な子どもの内
的世界を探ろうとする姿勢が考えられる(村井・
森上1987, 大前2011)。この三点は、質的研究によっ
て可能となると考えたことから、本稿では、保育
学研究における質的研究を取りあげることとする。

また、往々にして、保育現場では、「こういう
時はこうすればよい」と現象から具体的な保育方
法への迅速な結びつきが求められる場合がある。
これが、西本ら(2006)の指摘にあるように、理
論的整理や科学的分析の欠如の一因ではないかと
考える。保育者の経験則に基づいた根拠の明確で
ない常識論は、勿論、それらがすべて誤りである
わけではなく、むしろ、保育学分野における科学
的分析とは何か、保育者の経験則に基づいた理論
の信頼性について、十分な言及がなされなかった
ことを本稿で指摘し、質的研究の研究法に焦点を
当てることを試みる。そのため、質的研究の特徴

* 白梅学園大学大学院博士課程

** 子ども学部 発達臨床学科

を整理し、保育学分野の研究から検討することにより、手がかりが得られるのではないかと考え、保育現場をフィールドとする保育学分野の研究における質的研究を整理し、有用性や可能性、課題について検討する。

1. 質的研究の整理と検討

(1) 質的研究とは何か

ウヴェ・フリック（2017）は、質的研究は、「量的研究ではない」研究であることを主張し「そこにある世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、“内側から”社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する」と説明している。また、秋田ら（2014）は、「日常生活のなかで可視化されない部分に光を当ててその出来事の事象や構造を記述し解釈する研究」と説明している。先行研究の示す質的研究の定義を概観すると、量的研究と比較して、その特徴を強調しながら説明される言説があるが、「相互補完的な視座をもつ場合がある」（秋田ら2014）、「量的、実証主義的な研究で迫らなかった問題を扱うことのできる方法」（境ら2012）、「質的研究の方にも定量的に類似した手続きが含まれている場合も多い」（ウド・クカーツ2018）等と、質的研究は、量的研究と完全に対立する立場や方向性をもつ研究ではないという解釈が多い。また、保育学分野でも、質的研究と量的研究の双方の特徴を生かしながら、対象の全体像を明らかにしようとする研究（香曾我部ら2015、松延ら2015）が散見される。

質的研究には、様々な理論的・認識論的・方法論的アプローチが存在することが指摘されている（ウヴェ・フリックら2017）。中坪（2017）も近年に見られる質的研究の方法の多様性を「百花繚乱の様相」としている。このように、近年、多様さを見せる質的研究であるが、そこには共通した特徴が見出せる。

第一に、得られた言語データや観察データを対象の取り巻く社会文化的な文脈から解釈すること

である。また、研究者は、対象とは会ったことがなく、どういう人だかわからない、というわけではなく、対象との関係性を保ちながら結果を解釈する。そのため、その解釈の仕方には研究者の影響は否めず、「主観を排さない」（大谷2008）と評されている。このような質的研究における記述の重要性和恣意性について、無藤（2008,2009）は、「実際に起きたことの詳細を丁寧に見直し記述することと、実際のものや動きとともに論じることが望ましい」とし、解釈の恣意性を減らすために、詳細な記述と「できる限りすべての記述を分析する」ことの重要性を述べている。

第二に、個別具体的なアプローチが可能となることである。対象の置かれた環境やそこに息づく関係の個別性を排することなく、むしろ個別性に光を当てて、社会文化的文脈から解釈することが可能である。大谷（2008）は、教育の現場において求められ、機能する研究は、「実証性（客観性、信頼性を含む）」よりも、「実効性」の観点から行われる研究であることを述べている。質的研究により得られた個別具体的な結果の解釈が、教育・保育現場で生じる問題解決に向けて有効に機能する可能性があると考ええる。なぜならば、日々の保育で、保育者は、子どもの育ちの成果を評価することよりも、子どもが遊び等に取り組む過程での心の動き、人や環境との関わりを大切にしている。すなわち、できた／できなかったと子どもの育ちを評価するのではなく、子どもが遊びに取り組む過程がどのようなものであり、その過程において、どのように人・環境が構造化され、子どもの育ちにどのように影響し、どのような意味を持つのかを探るのに有効であると考ええる。

先行研究には、保育学分野の質的研究の可能性について、様々な点から述べられている。例えば、「データの可視化を通したメカニズムの解明」（二宮2017）という可能性や、「保育実践の社会的・文化的実践としての豊かさと奥の深さ」（柴山2017）という保育実践の研究のフィールドとしての可能性である。これらの可能性は、保育学分野

の質的研究の発展には重要な示唆を与えていると考える。

(2) 質的研究における対象との関係性と認識論的アプローチ

質的研究は、研究者と対象との関係性を保ちながら社会文化的文脈の中で解釈されることが特徴的であることを先述した。であるならば、研究者が、対象とどのような関係にあり、どのような文脈の中で対象を捉えるのか、その認識論的アプローチの仕方によって解釈が異なるであろう。

認識論の歴史的な流れを概観すると、従来、実証主義的アプローチとウェーバーの流れを汲む解釈的アプローチが共存していたが、社会科学の分野では、1950年代より実証的アプローチが優勢となり、だれが見ようと同じに見える客観的現実の法則（対象の測定、結果の数値化、統計的处理によって得られた結果）を定立することに重きが置かれ、量的研究により科学性を担保される見方が優勢となった（箕浦2001）。その後、1990年以降の言語を重視する立場、現象学または社会構成主義等の事象の捉え方が広がり（無藤2008）、質的研究の進展により、半ば実証的とも言えるやり方で実態を解明する方法が進展した（無藤2013）。しかし、このように、実証的アプローチで、ある事象の法則を定立することは、量的研究にのみ可能というわけではない。ギブス（2017）は「法則定立的アプローチと個性記述的アプローチは、両方とも質的研究では、一般的である。」と述べ、秋田ら（2014）は、質的研究固有の強みでもある、記述によるいくつかの事例を結び付けたり対比させたりすることで、法則定立的な主張の根拠となりえることを主張している。

近年、グラウンテッド・セオリー、TEM、SCAT等、様々な方法論の開発及び確立により、質的な分析を通して法則の定立を試みる研究が多数見られるようになった。質的研究の方法論の確立と拡大が進むほどに、その研究が採用した研究方法はどのような認識論に立っているのかに着目

して、その研究結果から導き出された主張の本質を理解することに、留意するべきであると考え。しかし、その研究がどのような認識論の立場をとっているのかは、「たとえて言うなら、海面上に見えている氷山を支える海面下の不可視の部分である」（柴山2017）という。

以上を踏まえて、次に、箕浦（2001）と柴山（2017）の分類に従って、質的研究に見られる代表的な認識論的アプローチを説明する。

第一に、「解釈的アプローチ interpretive approach」である。解釈的アプローチは、研究者も対象者も能動的存在であり、人間の行動や出来事の意味を研究者と対象者が行動や状況に埋め込まれた意味、対象者が生きている意味の世界を「分かる」ことをめざすアプローチである。これを保育学分野の研究に置き換えれば、子どもや保育者、それらを取りまく環境との関係性やそこで生成されている意味を分析し、法則性を見出すことを目指すアプローチであるといえる。

第二に、「批判的アプローチ critical approach」である。研究者は、対象に批判的意識や現状の改革を促す指導的立場であり、社会構造を変えていくことを研究の焦点としながら、対象者とともに学ぶという関係性を持つ。そのため、ある事実に作用する関係性や社会構造を批判的に分析することが中心となる。

この二つのアプローチに対して、「実証的アプローチ positivistic approach」では、対象は、研究者に対して受動的な関係性を保ち、研究者は、対象の様々な側面を客観的に捉えて計測してデータを収集する。正しく測るために状況を設定し、条件を統制して、得られた客観的事実の因果関係や普遍的な法則を見出すことが中心である。しかし、実証的アプローチから得られた客観的現実も分析という一連の操作を通して「再構築された事実」（箕浦2001）であって、事実そのものではないことを指摘している。

質的研究では、研究者と対象との関係性にも着眼しながら、現象を読み取ることが求められる。

そのため、保育学分野における質的研究では、研究者が、対象（子どもや保育者）に対して、どのような距離を保ち、どのような立場をとりながら関係を構築しているのかは重要である。研究者と保育者の連携の重要性について、田中（2017）は、「その場の子どもの姿から見えなかったことが、保育者の解説で理解できる。研究者のとらわれを実践者が解放する可能性がある。」とし、研究者の限定的な視点や理解を実践者と連携しながら研究することによって解放され、広げられる可能性があることを述べているが、無藤（2008）は、経験者の視野の狭さを指摘している。研究者自身の保育者との位置関係や保育者に対する捉えもまた、多様であり、保育者と研究者が、研究に対してどのように向き合い、役割を担っているのかも注目すべきである。

（3）質的研究の方法

①データ収集の方法

研究者がフィールドにどのように参与しながらどのようにデータを収集しどのように記述するのかは、質的研究において重要である。次に、質的研究のデータ収集の方法について、整理する。

*エスノグラフィー

「現実是他者との関わりの中で構成されている」という解釈でなされる方法である。現在は様々な分野でフィールドワークとして、研究者が現場で活動しつつデータを得て、検討する手法として展開されている。

保育学分野では、柴山の考案したエスノグラフィーの手法がよく知られている。すなわち、「保育実践過程や子どもの発達過程の複雑さを理解することを志向し、保育者ではない研究者が消極的な参与の立場で、フィールドデータを収集する」（柴山2017）手法である。研究者は保育現場に参与し、そこでの実感をも肯定しながらデータを収集し、分析をする研究である。最近は、この手法が発展し、研究者自身が保育者として現場に参与

しながら、研究者自身を対象として、「自己エスノグラフィー」という手法が見られ、エスノグラフィーが保育学分野で展開されるにつれてその応用的な手法が試みられている（濱名2018）。また、より焦点化されたエスノグラフィーとして、研究者があるテーマを持って保育実践に寄り添い、時には協働して実践し、その軌跡から実践のあり方等を意味づけながら解釈する「アクションリサーチ」も見られる。保育学分野のアクションリサーチによる研究は、批判的アプローチと考えられる研究が散見される。具体的には、園内の子どもの遊びの現状（河邊2004）、研究の方向性の二極化（山田2011）という現状を批判的に捉えて変革していくことを目指したものである。河邊（2004）は、幼稚園での幼児のウッドデッキでの遊びの豊かさを保障できるように、子どもの姿や保育者の援助を観察しながら、環境整備を繰り返した。その結果、遊びの拠点閉鎖型、遊びの拠点開放型、機能活用型という点から、園環境全体の遊環境の有効性について考察した。また、山田（2011）は、幼稚園の絵本コーナーとその周辺の正確な距離や面積の測定と3～5歳児クラスの子どもの姿の観察結果の質的分析を組み合わせることによって、保育者の経験則の検証を試みた。この研究は、絵本コーナーが「絵本を読む場所」として定着していく過程を分析した。その結果、その過程には、絵本コーナーにしながら隣接空間の友達と「一緒にいる」という感覚、空間としての独立と他の場所にいる子どもとの視覚的關係、子どもの「回遊を好む」特徴に対応して、回遊動線を限定しつつ、落ち着きを保てるような配置が見出された。この二つの研究のように、保育現場の現状を改善することを目的としながら、改善のプロセスを追ったアクションリサーチが見られる。

*ナラティブ

対象へのインタビュー、対象の語りにより得られたデータを質的に分析したものである。インタビュアーである研究者とインタビュイーである対

象とのやりとりから得られる語りを言語データとして、収集する。対象は、研究者とのやり取りを通して、過去の経験やその時の感情、社会的背景などが掘り起こされ、かつそれを表現することで対象自身が改めて解釈しなおす。この過程を通して、対象の過去の経験やその意味づけが再構成されるのである。

保育学分野では、主に、研究者が保育者へのインタビューをして、保育者が自己の保育実践経験や保育者としてのライフストーリーを語る方法が見られる（香曾我部2013）。香曾我部（2013）は、保育者効力感を縦軸としたライフラインインタビューメソッドの手法を用いて、保育者の転機の時期やその要因、プロセスについて、得られたデータを質的に分析した。その結果、保育者の転機には、保育者の問題認識、省察、将来の展望、困難な状況の発生、他者との相互作用の活性化、他者との実感と展望の共有の段階のプロセスとして認識しており、他の保育者と実践コミュニティの形成と将来の展望を共有することの重要性を示した。

また、複数の対象があるテーマや目的について会話をし、その自然なやり取りから、研究目的に迫る意味を見出す手法（上田2014）も見られ、保育カンファレンスでの保育者同士のやりとりを分析した研究が見られる。上田（2014）は、保育者を対象としたインタビューデータをSCATとTEMで分析し、得られた概念コーディングを発生の上層モデル（価値観、日常行為、その間にある中間層）でモデル化し、保育行為スタイルが分岐するプロセスと維持のプロセスを明らかにした。

二宮（2017）は、このような手法について、「これまで保育者自身でさえ意識していなかった言葉やしぐさに光があてられ、保育者の専門性の一端が新たに浮かび上がってくる。」とその有用性を述べている。

*質的観察法（エピソード法）

特定の場合における観察記録から研究目的に沿ったエピソードを抽出し、その解釈を与え、次のエピソードに当てはめて、妥当性を見ていく手法であり、保育現場において、古くから行われていた。

保育学分野では、実践記録とその省察の記述を関連させながら解釈する「実践研究」が見られる。無藤の提案する「再詳述法」、ソーンの提案する解釈記述アプローチなどの開発は、これらの質的な方法論への位置づけを試みるものである（サトウら2019）。保育現場をフィールドとした質的研究では、分析の方法として、対象の年齢や場面ごとの類型化や比較検討による分析が中心であるが、2015年ごろより、観察による映像データを記述したもののコード化を通じた研究が多く見られるようになった。

*映像や画像を用いた方法

映像や画像等による視覚イメージと対象がそれに刺激を受けて語る内容を言語データとして抽出し、双方を連動させながら分析する方法である。対象の言語化された「語り」から、その人の行動を方向づける暗黙的な意識や信念、価値観といった内的要因を探る。また、研究者が用意した画像・映像を視覚イメージとする方法と、研究者が撮影した視覚イメージを材料に分析する方法がある。対象がある場面を映し出した映像や画像に刺激を受けて、あるいはそれを通して、何をどのように語り、解釈するのかを分析する。

保育学分野では、「多声的エスノグラフィー法」として、保育場面の映像を保育者が視聴して語る手法を用いて、日独の保育者がどのような実践知を持っているのかを比較検討した研究（芦田ら2006）や、「写真投影法」（宮本ら2016）、「描画法」（内野2019）として、子どもが撮影したり描いたりした素材をとそれを通して語りを分析する手法が見られる。

宮本ら（2016）は、幼児の行動を規定すると考えられる遊び場の認識や価値という、個人内の認知に関する側面に焦点を当てて分析した。その結

果、幼児は、経験を通して、独自の意味を場に付与することで、潜在的に持つ場の意味や構造に多様な広がりをもたらし得ることが明らかとなった。内野（2019）は、卒園生の描いた幼稚園内の築山の絵を分析することによって、子どもの体験に結びついた場の意味を探っている。その結果、築山には、運動遊具的な機能や自然環境との出会い等、複合的な意味合いが体験とともに付与されていることが明らかとなった。

②分析の方法、方法論

収集した質的データの分析にあたっては、すべてのデータを分析対象にし、分析プロセスについて、詳細にかつ隠し立てをせずに記述することが重要であるは先述したが、近年、記述内容のコード化による分析は、方法論が多様に開発され、保育学分野にも広く使われるようになった。次に、保育学分野の研究によく見られる分析方法について述べる。

* グラウンテッド・セオリー・アプローチ (GTA)、 修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)

グラウンテッド・セオリー・アプローチは、Straus と Glaser によって開発された手法である。記述データに含まれる特定の現象に対して、コードを付与し（コーディング）、類似した現象をカテゴリーとしてまとめる作業を繰り返し、複数のカテゴリー同士やそれぞれの特性との間の一般的な関係を構成したカテゴリー表を作成する。そして、データの中に潜む文脈を「ストーリーライン」として抽出して理論化し、ある現象の構造的な特徴を描き出す分析方法である。

修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) は、よりプロセスを重視し、実践的に理解・活用しやすくした分析方法である。複数の事例に見られるプロセスを幅広く説明できる一方で、収集した事例数が多くなると、特定の事例では見られなかった行動の意味を表現するには困難

が伴う（境ら2012）ことがあるという指摘が見られる。

保育学分野の研究では、保育者を対象とした、インタビューデータを分析したものが中心である（田中2010, 郷家ら2018）が、観察データをもとに分析を試みた研究も見られる。例えば、田中ら（2013）は未就園児の保護者を観察し、中田（2019）は幼児の観察データを分析した。

田中（2013）も郷家ら（2018）も幼児の鬼ごっこを対象としている。田中（2013）は、保育者の指導プロセスに焦点を当てて分析した結果、すべてのカテゴリーに関連する「遊びの流れづくり」という構成要素が見出され、「主体的参加への誘導」、「自己メンテナンス化」、「経験の積み上げ」が抽出された。一方、郷家ら（2018）は、鬼ごっこは子どもが自発的に始める遊びであることが多いことから、保育者の指導プロセスよりも鬼ごっこの展開に対する保育者の実践知に着目した。その結果、「状況変化への対応」、「双方向的なやりとり」、「子どもの特性の理解」という構成要素が見出された。田中ら（2013）と中田（2019）は、観察データを用いたことが特徴的であるが、田中ら（2013）は、M-GTAを採用することにより、未就園児保護者の「とまどい」、「こちよさ」といった意識の変容プロセスが明らかになった。それに対して中田（2019）は、GTAを採用することにより、園内の閉所という特定の場での子どもの行動を観察し、子どもにとっての閉所の機能を横断的に分析した。その結果、偶然性を孕んだ共有と転換という機能が見出された。これらの研究からは、研究対象の年齢や場面のみならず、分析の着眼点の違いにより、抽出される構成要素が大きく左右されることが特徴的である。

* SCAT (Step for Coding and Theorization)

SCAT とは、大谷が開発した質的データ分析手法である。言語データのコーディングの困難さを4つのステップを踏むことで克服し、理論化する手法である。すべての言語データを明示的に

コーディングすることから、データの解釈が独りよがりにならず、小規模データでも分析可能であることが特徴である。

保育学分野では、保育者を対象としたインタビュー調査を分析した研究（香曾我部2013、櫻井2019）が中心であるが、SCATのみならず、他の手法と併用しながら分析する研究も多く見られる（上田2014a,2014b、中村ら2016、松延ら2015）。

SCATは、記述データから構成要素を横断的に抽出する手法であるが、調査時期を変えて数回行うことにより、プロセスを見出すことが可能である。櫻井（2019）は、この分析方法を効果的に用いた結果、保育者自身が子どもとの姿を通して省察を重ねることにより、保育者に納得感が得られ、保育者の熟達化につながることが示した。上田（2014）も同様の手法を採用し、プロセスの全体像を三層モデルで描いている。中村ら（2016）、松延ら（2015）は、量的分析と質的分析の両方を用いた研究を行っている。中村ら（2016）は、2歳児保育室の環境構成の変化に伴う対象となる保育者の援助を量的に分析した結果と、その保育者へのインタビュー結果をSCATで質的に分析している。このように、特定の行動を量的に捉え、それに質的分析を加えることにより、分析対象となる保育者の行動の根拠や行動を支える意識の変化を捉えている。一方、松延ら（2015）は、保育者の選択する服装の色彩に着目した。色彩の印象評価を量的に分析し、保育者へのインタビュー結果から、選択の根拠や選択に至る経緯を質的に分析している。この2つの研究のように、対象に量的な分析結果を開示しながら、その根拠や関連事項について質的に分析することにより、研究結果の実効性が高まると考える。

* 複線経路・等至性アプローチ（TEA）

対象の構造ではなく、プロセスと発生を理解しようとするアプローチであり、「複線経路・等至性モデル（TEM）」、「歴史的構造化招待（HIS）」、

「発生の三層モデル（TLMG）」を統合したものである（安田ら2015）。

時間を捨象せずに人生の理解を可能とすることから、保育学分野では、保育者のライフヒストリーを分析する際に用いられることが多い。個人の経験や分岐点が出会うときの選択には、社会的影響を受けていることを表しやすく、かつ、選択に関する対象の指向性を表現しやすく（境ら2012）、時間的な流れを図式化することで、他者と共通理解を促すことが容易になることが、特徴である。最近では、TEMの描き方に工夫を試みる研究もある。例えば、上村（2018）は、子どもと保育者の相互主体的な関係構築のプロセスを、三つのモデル（TEM, Parallel-TEM, Parallel-3D-TEM）で可視化し、その利点と課題点を考察した。

一方で、子どもを対象にTEMを描き、分析する研究もある。子どもの遊び場面のプロセスをTEM図にして保育記録の要点を見出す研究も見られる。小幡ら（2019）は、子ども3名の3事例をTEMに描き、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連させながら分析した結果、子ども1人ひとりの遊びをとらえる際には、分岐点（BFP）の存在を考慮することが有益であることを示した。また、境ら（2012）は、子どもの遊び場面の同一の観察データをM-GTAとTEMでそれぞれ分析した。その結果、いずれも現象のプロセスを捉えることが可能であるが、M-GTAは、現象の変化の様態を描きやすく、TEMは、時間が持続する中での対象や現象の変容を描きやすいことを示した。

総合的考察

保育中に起こる出来事、子どもや保育者の行為には、それらを取り巻く多様で複雑な構造をもつ環境やその関係性、あるいは、それらを決定する保育者の実践知が関連しているであろう。そのため、保育学分野の研究では、収集したデータを社会文化的な文脈の中で個別具体的に解釈することが求められる。保育実践や省察の詳細な記述を分

析対象とする質的研究は、保育学分野での適用可能性は大きいと考える。

また、保育学分野に求められる理論的な整理は、質的研究の分析方法である、データを解釈し、それを類型化したり、比較したり、決まったパターンを見出しながら、意味づけ、理論化するという方法によりそれは可能になる。近年は、質的研究に適用される分析方法も多様に開発され、ある事象の構造的な分析をしたい場合には、GTA、M-GTA、SCAT といった手法、時間的推移による変容を分析したい場合には、TEA が適切であると考えている。いずれも、質的研究の特徴をよりよく生かすためには、データすべてを分析対象とすることが必要であり、そのデータに埋め込まれた意味を社会文化的文脈から、個別具体的に探ることが重要であると考えている。

従来、質的研究の要となる、個別具体的な記述データを分類・比較分析する手法には、結果の再現性や実証性の欠如が指摘されていた。しかし、SCAT や TEM、GTA 等の一定の手法の開発により、個別具体的な記述データからの構成概念抽出に説得力が増し、さらに、保育実践者と研究者の連携により、結果を保育実践に役立てようとする動向が見られ、結果の再現性や実証性よりも、結果の実効性を重視する傾向が見られるようになった。質的研究を用いることにより、保育学分野においては、言語データを対象からいかに引き出しやすくするのか、そして、得られた言語データから、どのように構成概念を抽出するのかという課題を解決していける可能性があると考えている。また、結果の再現性や実証性よりも保育の質向上に役立てるような、実効性を重視するという価値観の変容を可能にしたのではないかと考える。

しかし、こうした手法で、一つひとつのデータをコード化したり、分類したりする中で、困難さを感じることもある。それは、研究者として、結果を分析・解釈して何らかの形で理論化したい、という思いで探求しつつも、子どものつぶやきや何気ない行為が心に掛かるときである。このよう

なときに、「なぜ、私はこの子どもの行為が心に掛かるのか」を自問自答する。すると、その子どもを取り巻く園環境や周りとの関係性、そして、その対象の特性を捉え、認識し、意味づける「保育者の実践知」ならず、対象と出会い、継続的に調査をする中で「研究者としての知」が研究者自身に形成されていることに気づく。

研究者もまた、子どもや保育者を取り巻く社会文化的文脈の中にあり、あるいは隣接しながら存在するのではないかと考える。保育学分野で質的研究の有用性を生かすためには、研究者自身が、どのような枠組みで対象を捉えて、どのように解釈しているのかを自覚的に照射することが求められるのではないかと考える。今後は、保育学分野の質的研究の発展に寄与するために、保育者の実践知とともに研究者自身の形成する知に着目することを提案する。

引用文献

- ・秋田喜代美、能智正博監修、秋田喜代美、藤江康彦編 (2014)「はじめての質的研究法教育・学習編」東京図書
- ・秋田喜代美監修 山邊昭則、多賀巖太郎編 (2016)「あらゆる学問は保育につながる 発達保育実践政策学の挑戦」東京大学出版会 .p.3
- ・芦田宏、秋田喜代美、鈴木正敏、門田理世、野口隆子、小田豊(2006)「多声的エスノグラフィー法を用いた日独保育者の保育観の比較検討―語頻度に注目した実践知の明示化を通して―」『教育方法学研究』第32巻 pp.107-117
- ・Evans, G. W. (2006) : Child development and the physical environment. *Annual Review of Psychology*, 57, pp.423-451.
- ・郷家史芸、松延毅、松延摩也子、石田淳也、本田由衣、藤田清澄、香曾我部琢 (2018)「園庭におけるおにごっこの展開プロセス～おにごっこを展開する保育者の実践知～」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』第25巻 pp.25-32
- ・濱名潔 (2018)「保育研究における自己エスノ

- グラフィーの可能性と課題』『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部』第67号 pp.99-108
- ・池田史枝 (2019)「保育学研究における被引用文献数調査とその特徴」『白梅学園大学教職課程研究』(2), pp.11-20
 - ・河邊貴子 (2004)「環境の改善は、幼児の遊びの展開にどのように変化をもたらすか〜遊びの充実を目指したアクションリサーチ第2報〜」『立教女学院短期大学紀要』36巻 pp. 9-24
 - ・香曾我部琢 (2013)「保育者の転機の話における自己形成プロセス—展望の形成とその共有化に着目して—」『保育学研究』第51巻第1号
 - ・香曾我部琢、橋本麻美、阿部晴佳 (2015)「保育室の壁面装飾に関する意識と方略：保育室の壁面色彩についてのSD方とのPAC分析による混合研究法の試み」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』第22号 pp.15-23
 - ・松延毅、姉帯彩香、林将平、香曾我部琢 (2015)「保育者は自らの服装の色彩をどのように決定しているのか：混合研究法による保育者の服装の色彩印象評価の分析より」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』第22号 pp.3-13"
 - ・箕浦康子 (2001)「仮説生成法としての事例研究—フィールドワークを中心に—」『日本家政学会誌』vol.52, No.3 pp.293-297
 - ・宮本雄太、秋田喜代美、辻谷真知子、宮田まり子 (2016)「幼児の遊び場の認識：写真投影法を用いて」『乳幼児教育学研究』第25巻 pp.9-21
 - ・村井潤一、森上史朗編 (1987)「保育の科学」『別冊発達』6. ミネルヴァ書房 .pp.6-15
 - ・無藤隆 (2008)「質的研究の動向」『日本家政学会誌』vol.59, No.1 pp.47-51
 - ・無藤隆 (2013)「実践現場における発達研究の役割：実践的研究者と研究的実践者を目指して」『発達心理学研究』第24巻第4号 pp.407-416
 - ・中坪史典 (2017)「保育フォーラム＜テーマ＞保育学の方法論を考える (1) 保育実践と質的研究：その「質」を問う」『保育学研究』第55巻第3号 pp.105-120
 - ・中村知嗣、石田淳也、藤田清澄、本田由衣、松延毅、松延摩也子、香曾我部琢 (2016)「2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容Ⅲ—SCATを用いた混合研究法による一考察—」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』第23号 pp.15-20
 - ・中田範子 (2019)「保育現場における閉所の子どもにとっての意味」『保育学研究』第57巻第2号, pp. 222-231
 - ・二宮祐子 (2017)「保育フォーラム＜テーマ＞保育学の方法論を考える (1) 保育・子育て支援の実践現場におけるナラティブと研究視角」『保育学研究』第55巻第3号 pp.105-120
 - ・西本雅人、今井正次、木下誠一 (2006)「保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第601号 pp.47-55
 - ・小幡真菜、若山育代 (2019)「自然物を用いた色水遊びにおける年中児の同型的行動」『とやま発達福祉学年報』(10), pp. 3-12
 - ・大前玲子 (2011)「人間科学アプローチとは何か」大阪大学大学院人間科学研究科紀要37号 pp.135-148
 - ・大谷尚 (2008)「質的研究と何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして—」『教育システム情報学会誌』、vol.25, No.3, pp.340-354
 - ・境愛一郎、中西さやか、中坪史典 (2012)「子どもの経験を質的に描き出す試み」『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部』第61号 pp.197-206
 - ・櫻井貴大 (2019)「障害児を保育する保育者の熟達化に関する研究」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要』(52), pp.67-76.
 - ・サトウタツヤ、春日秀明、神崎真実編 (2019)「質的研究法マッピング」新曜社 pp.93-100
 - ・柴山真琴 (2017)「保育フォーラム＜テーマ＞保育学の方法論を考える (1) 質的研究の

- 計画—実践—報告における質的検討」『保育学研究』第55巻第3号 pp.105-120
- ・ 田中文昭、戸田有一、横川和章（2013）「幼稚園での異年齢交流型子育て支援プログラムにおける未就園児親子と在園時との関わり—行動観察記録の M-GTA による質的分析—」『保育学研究』第51巻第2号 pp.109-121
 - ・ 田中浩司（2010）「年長クラスにおける鬼ごっこの指導プロセス— M-GTA を用いた保育者へのインタビューデータの分析—」『教育心理学研究』第58巻第2号 pp.212-223
 - ・ 田中浩司（2017）「保育フォーラム＜テーマ＞保育学の研究方法論を考える（1）フィールドとの対話としての質的研究」『保育学研究』第55巻第3号 pp.105-120
 - ・ 内野彰裕（2019）「園庭における幼児の自然体験に関する実践的研究」『こども環境学研究』vol.15.No.3, pp.83-90
 - ・ 上田敏丈（2014）「保育者のいざこざ場面に対するかわりに関する研究—発生の三層モデルに基づく保育行為スタイルに着目して—」『乳幼児教育学研究』第22号 pp.19-29
 - ・ 上田敏丈（2014）「初任保育士のサトミ先生はどのようにして「保育できた」観を獲得したのか？—保育行為スタイルと価値観に着目して—」『保育学研究』第52巻第2号 pp.88-98
 - ・ 上村晶（2018）「保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する試み」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第17号 pp.13-30
 - ・ ウド・クカーツ著、佐藤郁哉訳（2018）「質的テキスト分析法」新曜社
 - ・ ウヴェ・フリック監修、グラハム・R・ギブス著、砂上史子、一柳智紀、一柳梢訳（2017）「SAGE 質的研究キット 質的データの分析」新曜社
 - ・ 山田恵美（2011）「保育における空間構成と活動の発展的相互対応—アクションリサーチによる絵本コーナーの検討—」『保育学研究』第49巻第3号
 - ・ 安田裕子、滑田明暢、福田茉莉、サトウタツヤ
- 編（2015）「TEA 実践編」新曜社 pp.4-7